

夏目漱石

日英博覧会の美術品



# 日英博覧会の美術品



上野に行つて日英博覧会に出る美術品を見たが、その点数の少ないことは驚くほどであつた。あのくらいのものを大きな建物のうちにちよんぼり陳<sup>なら</sup>べて、これが東洋美術を代表したものだと言ふに誇ることとはどうもいできない。事務官の話では、このほかに六十点ほど大阪方面からの出品が加わつたうえに、文部省の買<sup>かい</sup>上<sup>あげ</sup>品<sup>ひん</sup>を六<sup>ろく</sup>点<sup>てん</sup>だけ打<sup>うち</sup>込<sup>こん</sup>んで、はじめて送り出すのださうであるが、よしそれだけ増したところで総体の量においてたいした変化

のあるようにも思えない。当日陳列室を無雜作むぞうさに通り越して、なんだかあつけなかったと感じたものは、おそらく自分一人ひとりではあるまい。陳列室はわずかに二つしかなかった。そうしてその一つは個人の客間ほどに狭いものであった。

自分はこんなことに不案内な人間だから、実際の事情はよく知らないが、たゞこの陳列室を通り抜けただけでは、今回の博覧会が美術の方面に重おもきを置いて計画されていかなかったようにも思われる。それがあるいは真相かもしれない。しかしいくら大袈裟おおげさに美術の出品を奨励し

たつて、やはり物足りないような顔をして陳列室を出るのが、我々の運命じやなかろうかと考え付いたら、だいぶ元気が沮喪した。なるほど奨励やら勧誘やらの結果一昨日おととい自分の見た十倍もしくは百倍の美術品を海外の博覧会に送り出す方針は、時日さえあれば容易に立て得られるだろう。けれどもその十倍なり百倍なりの陳列品が並んだところを眼中に想像してみると、いたずらに参観の際根気を疲らすだけで、存外変化に乏しい重複を示されるのが、わが邦くに美術界の今日こんにちらしい。

ほんとうのことを言うと、一昨日見ただけで、今日の

日本に産出しうる美術品の九割以上はすつかり網羅して  
いるのである。しかも各部門にわたつての代表的出品は、  
多少の例外はあるにしても、まあ精華を萃め<sup>あつ</sup>たものと言  
つても宜<sup>よろ</sup>しい。それがなぜあんなに物足りなかつたと言  
うと、まったく美術の性質に因ると言うのほかはない。

日本の美術はほとんど、手に取つて撫摩<sup>ぶま</sup>すべきもので  
あつて、一定の距離に立つて観賞すべきものでない。吾々  
の着物がすでにそうである。四畳半の座敷で差向<sup>さしむか</sup>いの相  
手に賞<sup>ほ</sup>めらるべく三越<sup>みつこし</sup>を煩<sup>わづら</sup>わすのほかほとんどなんの  
取柄<sup>とりえ</sup>もないと言つて宜しい。日光の廟舎<sup>びやうしや</sup>がすでにそう



である。局部々々を吟味すると御念ごねんの入った精巧を尽く  
 している。しかしあれだけの殿堂を望むに適当な距離に  
 遠退とおのいて見ると、せつかくの局部の苦心は犬死いぬじにをしてし  
 まう。一昨日陳列された美術品の多くは、呉服物や日光  
 のお宮と同じく、好んで椽えんの下で力持ちからもちをしている。狩か  
 野芳崖のうほうがいの観音様かんのんさまを一生懸命に刺繍にしたり、観音様を  
 見ようとすれば刺繍の手際は目に入らないくらい離れな  
 くちやならない。無線七宝しゅっぽうであざやかに鴨かもの色を染め出  
 したって、額にして下から見ると以上は、絹えがに画いたもの  
 とどこが違っている。大きな銀瓶ぎんへいに寒山拾得かんざんじつとくを彫り付け

た手際の冴さえているのは、たゞ筆力をいつそう困難な刀とう力りきに移したというまでで、それ以外になんらの特色のな  
いのみか、花瓶かへいの見ごろな所に立ち留とどまっていれば、寒山  
も拾得もてんで顔さえ明瞭めいりょうには分わからない。

全部と局部と比例を失した労力の損はまずどうでも構  
わないとして、たいていの出品は皆手先の器用からのみ  
でき上あっている。もちろんそれが日本人の長所だから結けっ  
構こうには相違ないが、あまり器用すぎるから、針の先で指  
ができてくるかのごとき細かな仕事ばかり為しておおせてい  
る。したがって精緻ではあろうけれども、あの西洋の大

きな客間の隅へでも置こうものなら、虫眼鏡むしめがねを掛けてい  
 ない以上、誰だれも気が付かずに済んでしまう。今の世に用  
 もない鍰つばを拵こしらえて、それに小さい不動様ふどうさまなんか喰くつ付  
 けている。まるで玩具がんぐである。西洋人が鍰を珍重するの  
 は昔の遺物として、その当時相応の理由があつてでき上  
 がつたもののうちに、一種の手際を認めて、喜ぶのであ  
 る。巻ま苘きたばこ入いれだつてそうである。わずか五六寸四方のう  
 ちに、あんな七面倒しちめんどうな悪戯いたずらをして幾日いくかも潰つぶすにはあたる  
 まい。

要するに頭に一種の精神があつて、その精神が手を働

かすのでなくって、手の筋肉の使用法だけを繊細に吞込のみこんだのが日本の美術家である。彼等は頭を使うんじやない、指のほうが修練の結果器械的にうまく動いてくれるのである。いかにも器用だとは思むこう。しかし向うの頭がこっちの頭に感応することは少すくない。だから手に取とつつてよくほじくって見ても物足りないのである。まして適当な距離から大きく観察するにおいてをやである。いわんやイギリスへ持すみって行すみって広大な建物の隅すみにちよんぼり並べらるるにおいてをやである。

自分は日本の美術について専門家の口にするような巧

拙は分らない。自分の言うところは、技芸の巧拙いかに  
 にかゝわらず存在する、日本美術にほとんど固有ともい  
 うべき特色に関してである。もちろん自分の非難に相当  
 しない物品はいくらでも出て来るだろう。現に陳列品の  
 うちにもずいぶんあった。自分はあるてこれ等の佳作に  
 対して敬意を表するに躑躅ちゆうちよするものではない。

(明治四二・一一一・一六)



日本文学電子図書館

---

日英博覧会の美術品

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 7 卷」角川書店  
昭和42年 6月30日 6版発行

---

日本文学電子図書館